

## 美術館ニュース

## 特別企画

おかやまアート・コレクション探訪  
— 仮面 — 精霊たちの微笑み

会期：2009年8月27日(木)～11月8日(日)

岡山県下に秘蔵されるコレクションを紹介する特別企画「おかやまアートコレクション探訪」— 今年、県在住の個人が収集した仮面を中心とするアフリカとパプア・ニューギニアの造形美術を紹介します。

アフリカにおいて仮面を持つ部族は、赤道をはさんで北緯 15 度南緯 15 度のあいだ、赤道アフリカと呼ばれる地帯に集中しています。仮面は、葬送儀礼や通過儀礼、農耕儀礼などに際し、重要な役割を果たし、各部族の信仰や観念、文化を表象するものと考えられています。人や動物を象ったさまざまな仮面は、写実的であったり、デフォルメされていたり、造形として見ても大変興味深いものです。

また、パプア・ニューギニアにおいては、セビック川流域、ラム川流域で多くの作品が作られました。村の中心部に建てられた「精霊の家(精霊堂)」は、儀式が執り行われる場所で、たくさんの精霊を描いた樹皮絵画や彫刻された祖先像、精霊像で装飾されています。きっと呪術的で不思議な空間だろうと思います。

これらの仮面は、ピカソやプラנקーシ、モディリアーニなど 20 世紀の芸術家たちに大きな影響を与えたことでも有名です。アフリカもパプア・ニューギニアも岡山からは大変遠く、実際に現地を訪れることはなかなか困難です。しかし、私たちは、多彩な作品を通して、異国の歴史や文化を学び、豊かなイメージを膨らませることができます。作品は、世界に目を開くきっかけになりましょう。本展を通して、アフリカやオセアニアの国々に関心を持ち、創造的なインスピレーションを得てもらえれば幸いです。

【学芸員 福富 幸】

《儀礼用仮面》  
ナイジェリア イボ族《儀礼用仮面》  
ブルキナファソ ブワ族

## 平成21年度展覧会スケジュール(9月～12月)

## 特別展紹介(会場：地下1階展示室)

9月18日(金)～11月3日(火・祝)

「ターナーから印象派へ」

11月19日(木)～12月6日(日)

「第56回 日本伝統工芸展岡山展」

## 岡山の美術展紹介(2階展示室)

8月27日(木)～11月8日(日)

特別企画「おかやまアート・コレクション探訪—仮面—」

「国吉康雄・坂田一男・小野竹喬・森谷南人子 生誕120年を記念して」

「原撫松の軌跡」

「大正期以降の油彩画と現代美術」

11月13日(金)～12月6日(日)

日本伝統工芸展関連事業「もっと伝統工芸 人形」

「追悼・竹内清」

「国吉康雄・都市の中の女性像」

「緑川洋一の写真「日本列島—内陸の山河」

## お知らせ

当館は冷凍機更新工事のため、平成21年12月7日(月)から平成22年1月21日(木)まで休館いたします。

次回開館は1月22日(金) 岡山の美術展「所蔵コレクション展—新収蔵品を含む—」「国吉康雄・線描の魅力」からとなります。

## 編集後記

当館で7月17日から8月23日に開催した特別展「建仁寺」では、たくさんのお客様にご来館いただきました。特に国宝◀風神雷神図▶が展示された会期末一週間は、一日平均およそ 6600 人もの来館があり、大変な賑わいでした。岡山での公開は、最初で最後かもしれません。夏休みということもあり、たくさんの子供たちも来館していましたが、彼らの心にはどのように残ったのでしょうか。いつか、日本史や美術の教科書で◀風神雷神図▶を見たとき、「実物を見たことがある!」と思い出していただければ嬉しいです。

【S.T.】



原 撫松「小室美恵像」

## 特別展の紹介

## 「ターナーから印象派へ」

2009年9月18日(金)～11月3日(火・祝)

J.M.W.ターナー(赤と青、海の入り日)  
1835年頃 個人蔵ポール・ゴーギャン(ディエップの港)  
1885年 マンチェスター市立美術館蔵カミーユ・ピサロ(ルーヴシエンヌの村道)  
1871年 マンチェスター市立美術館蔵

「あの松を見給へ、幹が真直で、上が傘の様に開いてターナーの画にありそうだね」と赤シャツが野だに云ふと、野だは「全くターナーですね。どうもあの曲がり具合つたらありませんね。ターナーそっくりですよ」と心得顔である。(夏目漱石『坊ちゃん』より)

『坊ちゃん』を読んでターナーを知った、あるいは、ターナーの描いた樹木を見ると夏目漱石の文章を思い出す、そんな人もいるだろう。言わずと知れた明治の文豪・夏目漱石(慶応3-大正5, 1867-1916)は、1900(明治33)年9月から文部省派遣留学生として2年間にイギリスで過ごした。彼の地でターナーをはじめ名作を数多く目にし、その経験が著作の随所に反映されている。

西洋美術の歴史を紐解いてみると、19世紀フランス発祥の印象派は、それまでの価値観を覆すような革新的な作品を生み出した。そして今日、最も人気の高い絵画潮流の一つである。光と色彩の溢れる画面に心奪われる人も多いだろう。フランスでその「印象派」の作品が生まれるより前に、同じく「光と色彩」に注目して作品を生み出した画家がいた。それが、先に挙げたイギリス・ロンドン生まれのターナー(1775-1851)である。

西洋における風景画は、17世紀オランダに遡る伝統を持つ。そして、フランスに生まれ、ローマで活躍した理想的風景画家・クロード・ロラン(1600頃-1682)に私淑しつつ、イギリス風景画の礎を築いたターナー。《赤と青、海の入り日》(図1)は、地平線に夕日が沈みゆく様を水彩ですばやく描いている。抽象画にも通じるような画面である。モチーフ、筆致、画面構成…。現代の我々の目から見ても、斬新な感覚が見受けられる。

ターナーと並び、イギリス風景画の礎を築いたのがカンスタブル(1776-1837)であるが、ターナーがあらゆる場所を旅してその風景を描いたのと同様に、カンスタブルは、生まれ故郷およびごく限られた場所に留まって制作した。留まっていたからこそ描くことのできたイギリスの風景が、カンスタブルの画面には見いだされる。

そんなイギリスの対岸、印象派を生み出したフランスに眼を向けると、フランスの画家たちもイギリスと固く結びつけられていることがわかる。ゴーギャンは、印象派の画家というよりもむしろ、タヒチでの制作活動の方が今日ではよく知られているが、

彼も確かに「印象派」に参加していた(印象派展への初参加は1879年開催の第4回展である)。《ディエップの港》(図2)は、イギリス海峡に面したフランスの港町。海に向こうはイギリスという立地である。

また、ピサロは、印象派展に全8回とも出品した唯一の画家で、セザンヌから「何かしら神のような存在」と称された人格者である。ピサロは子沢山で、子供たちはそれぞれ芸術家の道に進んだ。長男のリュシアン・ピサロ(1863-1944)は、父親と同じく画業を生業に選んだ。リュシアンが活動の場に選んだのがイギリスで、父ピサロは、文通によって、息子の芸術活動を支援した。ピサロとイギリスは、切っても切れない関係にあると言えるだろう。

現在、ユーロスターを利用すれば、イギリス(ロンドン)・フランス(パリ)間は約2時間半。両国は海を隔てた「隣国」である。歴史的にも、はるか以前から相互に影響を与え合ってきた。人も物も断絶されることなく行き交っていたのである。

今秋当館で開催する特別展「ターナーから印象派へ」は、イギリス国内に所蔵される作品を中心に、19-20世紀の英仏風景画100点を展観するものである。心象風景のような作品を描いたターナー、その一方で刻一刻と移りゆく光を描き取った印象派の画家たち。風景画の魅力の一つに、「疑似」旅行気分が味わえることがある。本展出品作の作品タイトルには、イギリス・フランスの町の名前が多数見られる。聞いたことがない地名が多くても心配ご無用。会場にはマップも展示してある。19-20世紀の英仏風景画を通して、イギリスとフランスに時間も歴史も越えて旅をする展覧会。ぜひお出かけください。

【学芸員 細田樹里】

## 関連事業

9月25日(金)18:00～

10月10日(土)14:00～

10月24日(土)14:00～

美術の夕べ「ターナーから印象派へ」をみる ※要観覧券

記念講演会「イギリスの風景画—ターナーそしてラスキン」

講師：河村錠一郎氏(一橋大学言語社会研究科名誉教授)

会場：当館2階ホール(定員210名 先着順)

美術館講座「イギリス風景画のみどころ」

講師：細田樹里(当館学芸員) 会場：地下1階講義室(定員70名 先着順)

**原 撫松**
**「小室美恵像」**
明治40（1907）年 油彩、カンバス、90.0x60.0cm
（この作品は、11月8日まで、「特集展示 原撫松の軌跡」のなかで展示しています。）
この作品は、原撫松の画業が最も充実していた英国留学期の作品です。モデルは日本企業のロンドン駐在員の妻であった人で、夫の肖像画である《小室三吉像》（当館蔵）として、極めて優れた油彩画を遺しました。

原撫松は岡山と京都で油彩画を学び、肖像画の名手として知られるようになった画家です。さらなる研鑽を積むため英国に留学し、同地の美術館でレンブラントの作品の模写などを行いながら、西洋肖像画の伝統的な技法を習得しました。そして当時の日本人としては極めて優れた油彩画を遺しました。この作品は、原撫松の画業が最も充実していた英国留学期の作品です。モデルは日本企業のロンドン駐在員の家族という特別な立場にあったがゆえに描かれた、当時としては新しい日本人女性のイメージであるとも言えるでしょう。

【学芸員 廣瀬就久】

鍵岡館長の

## 美術館体験の記②

## 収集について

美術館は一個の生命体であると思う。たえず活動する生き物である。その生命がいいきと機能するためには、作品の収集は必要不可欠な栄養である。

秀れた作品がどのように体系的に収集されているかは、美術館存在のステイタスである。

時代を超えて評価をうける作品の収集に力を発揮することはもとより、今日こそ再評価をすべき作品、更には同時代で将来評価が高まるだろう作品を蒐集する眼力を持ち蒐集する。これは生命体である美術館を活性化させる、重要な美的で知的な行為である。

秀れた作品は、私たち人間にたえず刺激と共感を与え、生きる喜びを実感させ、また来たるべき未来を予感させ、後世の人に最高の贈り物となるだろう。そのためにも美術館の視野は、50年、いや100年位先まで見通す文化力である。

美術館という文化組織体を考えたヨーロッパでは、国家が文化政策を主導し美術館を形成してきた。我が国の明治近代はその端緒であった。とはいえ、今日的な美術館の活動は60年前の神奈川近代美術館、通称〈鎌近〉の近代美術史観のもとで行われた近代美術作品の評価と蒐集が典型となっている。その後、100館をこえる全国に及ぶ公立美術館は、＜日本／近代／美術＞という日本独特の美術体系を多様に解釈し、作品蒐集を展開してきた。

わが美術館の“雪舟と水墨画” 蒐集は、その秀れた蒐集のひとつの在り方であるといえる。加えるに、岡山の近代美術作品を多角的に蒐集してきた。この基本方針のもとに、道州制の岡山、さらに日本に・世界に開かれた岡山県立美術館の作品収集は同時代的かつ将来的で拡がりのある豊かな作品が蒐集されていく必要が在ると思っている。

ともあれ、こうした県民はもとより国民いや人類と大きくいってよい、人間にとって貴重で大切な美的財産は最高の技術をつかい保存し、ときには修復される。これは美術館の使命である。また、個々の作品について調査・研究が徹底的に行われ、個々の作品に履歴書がつき、コンディションノートが付される。まさに作品は生きているのだ。

生命ある美術作品は、私たち生きている人間と共生しているのである。
【館長 鍵岡正謹】

### 近ごろの美術館

#### 国宝ってナンダ!? ―展示期間について考える―

当館で7月18日から8月23日まで開催した特別展「建仁寺―高台寺・圓徳院・備中足守藩主木下家の名宝とともに―」では、15件の重要文化財と1件の国宝を展示しました。国宝を展示する機会は、そう多くあるものではありません。今回は、その「国宝」についてのお話をしたいと思います。

特別展「建仁寺」では、会期末の一週間のみ国宝<風神雷神図>が展示されました。国宝中の国宝といわれ、地方での公開という非常に稀なケースでもあり、県内外から多くの来館者がありました。そもそも「国宝」とは、どのように定められているかご存知でしょうか。文化財保護法の第27条第2項で、「文部科学大臣は、重要文化財のうち世界文化の見地から価値の高いもので、たぐいのない国民の宝たるものを国宝に指定することができる」とされています。そう、条文からもわかるように「国」の「宝」ではなく、「国民」の「宝」なのです。平成21年8月1日現在で1078件の書画や彫刻、建築等が国宝に指定されています。

このたびの展示にあたり、「なぜ一週間しか展示しないの?」というお問い合わせを多く頂きました。これは、誰もが不思議に思うことかもしれません。平成8年に文化庁文化財保護部長より各都道府県および指定都市教育委員会教育長あてに通知された「国宝・重要文化財の公開に関する取扱の制定について」のなかで、国宝・重要文化財の具体的な公開の回数と期間について、「原則として公開回数は年間二回以内とし、公開日数は延べ六〇日以内」「たい色や材質の劣化の危険性が高いものは、年間公開日数の限度を延べ三〇日以内」と記されています。作品の状態によっては、より厳しい展示条件が借用先から提示されることもあります。<風神雷神図>は琳派の祖といわれる俵屋宗達の作品で、金屏風に描かれた作品はきらびやかなイメージがあるかもしれませんが。しかし今回の展示で、作品を間近にご覧になった方はお気づきになったと思いますが、風神、雷神ともに絵の具の剥落が激しく、痛々しかったですと思います。

美術館では、お客様に快適に作品をご覧頂きたいと思いますが、お客様より作品保存への配慮が優先されねばならないことがあります。展示室の照明が暗かったり、展示期間が制限されたりするのは、そのような理由からなのです。美術館は、多くの人にすばらしい作品をご覧頂く場でもありますが、作品を後世に伝えていく場でもあります。そのような理由から、展示期間が限られているのです。
【学芸員 齋藤武郎】

## 生誕120年 国吉康雄と坂田一男



国吉康雄&lt;祭りが終わった&gt;1947年 本館蔵



坂田一男&lt;キュビズムの人物像&gt;1925年 本館蔵

国吉康雄と坂田一男、ともに明治22年に岡山市に生まれ、岡山の近代洋画を代表する画家としてよく比べられる。国吉は9月1日に現在の出石町に、坂田は8月22日に船頭町に生まれており、生地は旭川の右岸で距離にして直線距離にして3キロほどである。生まれた日は僅か10日も違わない。ともに岡山高等学校を卒業しており、当時は8年制で、尋常小学校4年、高等小学校4年という学制であった。国吉は弘西尋常小学校から、坂田は岡山県男子師範附属小学校から同校高等科に進み、一年後に岡山高等小学校に転校、飛び級で3年次で卒業し岡山中学に入学している。従ってともに学んだのは2年間である。同じクラスにいたかどうかは、学籍簿などが戦災で焼失してしまっているので分からない。ちなみに内田百閒も同年の生まれで、岡山高等学校の卒業であり、この頃のことを随筆（郷夢散録など）に書いているので、この時代の同校や岡山の様子が分かり興味深い。少年期には二人とも絵が好きだったが、画家になる決意を固めるのは遅かった。

坂田は医者の家系で医者になるべく上級学校を受験するが失敗を重ね、精神的に落ち込んでいた時期に療養をかねて絵を学び、画家を志して上京し川端画学校に学んだ。1921年に渡仏、1933年までフランスに住んだ。最初フォービズムの画家オトン・フリエスに師事するが飽きたらずフェルナン・レジェの教室に学び、後にレジェの教室を任されるまでになった。サロン・ドートヌヌやサロン・ティユルリーなどに出品し1929年にはザック画廊で個展を開催している。

国吉は岡山工業学校染織科に進むが、17才になる直前に中退して渡米し、西海岸で様々な肉体労働に従事した。やがて画家になる決心をし1910年にニューヨークに移り様々な美術学校で学ぶ。1922年に初個展を開催してアメリカ画壇にデビューした。1925年と28年の二度フランスに渡っている。国吉の二度目のパリ滞在中はモンパルナスのサントブーブ街に住んだが、坂田がよく通ったレジェの教室があったアカデミー・モデルヌは直ぐ近くにあり、パリの街角で遭遇した可能性も充分ありそうだ。

フランスとアメリカ。彼らが学び生活した国の美術や文化はそれぞれの作品に決定的な影響を及ぼしている。坂田はキュビズムから抽象絵画へと進んで行くわけだが、パリ時代に坂田は単に絵画表現のスタイルだけでなく、生き方そのもの、自分が何者であるかということについての揺るぎない確信をつかんだことが、家族に宛てた手紙や写真を見る。国吉も二度目のパリ滞在は永住をも考慮してのことだったが、友人のバスキンの勧めにもかかわらず、パリには馴染めずニューヨークに帰り、以後自分の居場所はアメリカだと確信し、1930年代にはアメリカでの評価も定まっていく。

坂田がフランスの合理的な造形思考を制作の上だけでなく、生活の基盤にしたことは、その後の彼の行動を見るとよく分かる。終生「前衛画家」としての姿勢を崩さず、経済的な困難や周囲の理解のなさにも屈しなかった。作品は、キュビズムの対象の解体と再構成というプロセスを基本に、本質的なものを残して、「秩序と均整の美」を追求した作品系列と必ずしも合理では割り切れない混沌とした名付けようのない形象が描かれた作品がある。

国吉は戦争という最悪の事態に進んだ日米関係の中で、終始アメリカの自由と民主主義の立場に立って考え行動した。軍国主義の日本へは抗議したが、日本への思いを心のなかに常に保ち続けていたことが、義理の妹たちへの手紙や写真を見るに窺えるし、作品の中にそっと忍ばせるように、またある時には鬱屈した感情が複雑なシンボルの配置という形で現されている。人間の生の不条理を見つめヒューマニティへの信念を作品に込めて描き続けた画家といってよいであろう。

坂田は知、国吉は情といえるほど対照的な二人だが、「鯉のぼり」というモチーフに共通する作品があるのは興味深い。
【学芸課長 妹尾克己】

## 生誕120年 小野竹喬と森谷南人子

岡山県出身の日本画家、小野竹喬・森谷南人子の2人はともに明治22年に生まれ、京都で日本画を学んだ。国画創作協会（国展）・帝展・新文展等に出品するなど、共通項がいくつかあるが、その中で一番大きな点は、両者とも日本の自然美を画の主たるテーマとしていることと言えよう。ただし2人の画風は、ともに風景を題材としていても大きく違っている。竹喬は透明感のある鮮明な色彩、単純化された形態・装飾性などを特徴とし、樹木の幹や枝のリズム感、刻一刻と変化する自然のドラマ性といった美しい自然描写が誰もの目に浮かんでこよう。一方南人子は、繊細な線描で描かれた景物が独特で、明るく柔らかな色彩でまとめられたのどかな田園風景が持ち味と言えよう。2人とも、70年をこえる長い画業の中で新しい表現に挑戦しつつ幾度も画風を変え、試行錯誤を経ながら徐々に独自の風景表現を作り上げていった。ここでは2人の画風の特徴とその変遷について、大雑把ではあるがまとめてみたい。

Ⅰ、竹喬の場合

- ①師竹内栖鳳の影響（コロー・ターナーらに学んだ西洋画の合理的写実表現と円山四条派との融合）の強い時代。画学生時代から十代後半の頃。
- ②与謝蕪村や富岡鉄斎に傾倒し、今村紫紅や富田溪仙ら新南画の傾向に近い作風。大正初期。
- ③セザンヌらヨーロッパの後期印象派の影響の濃い時代。緑青や代赭などを多用した濃彩で、写実を徹底的に追及した頃。国展前期中心。
- ④南画を意識し、強い墨線に淡彩で南画のように表現した時代。東洋への回帰。国展後期から文展復帰の頃。
- ⑤戦後、自然を単純化し、象徴化を進め、独自の風景画スタイルを作り上げていく。

竹喬は特に③の時代、日本画の画材で西洋風の写実的な表現をすることが難しいことに大変苦悩している。「私が写実を突き進めば進むほど、その素材は矛盾だらけの、苦悩にも似た様相を示した。しかし私は、それを進む以外に道を知らなかった。暗い道が続いた。」※ 温和で誠実な竹喬が、画材と写実の限界との矛盾に悩み続け、新しい画風を模索しながら自分の表現を追求していく姿が看て取れる。

Ⅱ、南人子の場合

- ①画学生時代、静物や風景などを題材に、様々な習作に取り組む。中国美人の艶麗な姿を画題にした時期もあった。
- ②岩肌や樹木の塊の細部を緻密に描いた作品。カンバスのような荒い生地にかさかさした筆致の独特の絵肌をしたもの。大正時代。
- ③陰影のある鬱々とした風景《塩田暮色》などを大正期後半より制作、青緑系の強く重い色彩で描かれた《秋野斜陽》のような画風が変わっていく。昭和2～3年頃。
- ④繊細な線描と明るく温和な色彩で瀬戸内ののどかな自然を情趣豊かに描く。《桃花処女》（昭和15年）頃からは、細かな線が消え個々の景物を塊として表現するなど、変化を見せている。

このほか、南人子は大正時代を中心に、「森谷利喜雄」の本名で創作木版画を本格的に行ったこともあれば、油彩画も十数点制作している。

14歳で上京し亡くなるまで京都に住み続けた竹喬に対し、南人子は27歳で笠岡に帰り31歳で尾道に転居、92歳で亡くなるまで尾道で過ごした。この2人の一番の接点といえば、やはり国画創作協会時代（大正7年～昭和3年）であろう。竹喬は第10回文展（1916）で《島二作》が特選となったが、翌年《郷土風景》が落選、文展審査への強い不信感を抱いていた。新しく創設された国展は、「反文展」体制だけでなく、真の絵画表現への溢れんばかりの情熱と、真摯でかつ純粋な姿勢によって、混迷停滞していた美術界に大きな波紋を投げかけた。竹喬は、土田麦徳・村上華岳・榊原紫峰・野長瀬晩花らの4人とともに、創立会員の1人であった。

一方南人子は、第1回国展において《快晴》が、応募総数278点の中から「選外」（入選に当たる）となる。会員5人、入選と選外合わせても15人という激戦の中での快挙である。第2回国展でも389点の中から再び選外となり、第5回展から会友となっている。

竹喬と南人子は、ともに国展を舞台に、若い日本画家たちの熱気に包まれながら、積極的に西洋画の技法や思想を取り入れたり、画材に対する研究をしたりして新しい表現に挑み、研鑽を積んでいる。

このたびの特別企画では、笠岡市立竹喬美術館・尾道市立美術館にご出品いただき、当館藏品と合わせて、2人の画業の変遷をおよそ概観できる内容になっている。同時代を生きた2人の日本画家の個性に満ちたそれぞれの作品の魅力を味わっていただきたい。

【主任学芸員 中村麻里子】

※「私の歩んだ道」『京都市美術館ニュース』64号 昭和44年5月



小野竹喬&lt;晩春図&gt;1916年 笠岡市立竹喬美術館蔵



森谷南人子&lt;海のみえる風景&gt;1922年 個人蔵